

遠州報国隊と近代日本——国学・草莽隊の近代とその伝説化

馬塚智也 日本史学分野・専門 博士前期課程2年

「草莽隊」は、幕末期に尊王攘夷運動などの政治的要求を持った在野の者たちが結集した組織である。従来の研究では、彼らは集団で要求を達成すべく行動を起こしたが、明治期に入るとそれらは否定され抹殺されていったと評価されてきた。本プロジェクトでは、慶応4（1868）年に遠州地域で結集した「草莽隊」の遠州報国隊を対象として、①幕末期の運動である「草莽隊」が維新时期以後の近代社会に与えた影響の検討、②幕末期の「草莽隊」の運動が「勤皇義団」として伝説化されていく過程の分析の2点を課題として検討し、幕末期に発生した「草莽隊」の運動について、その意義と影響を近代社会の中に位置づけ、考察を行う。本稿では、その調査・検討の結果を著す。

遠州報国隊は、明治元（1868）年末に江戸での従軍活動を終えたのち遠州地域へと戻ったが、一部の者が旧幕臣からの襲撃回避のため東京へ移住し、靖国神社の前身である東京招魂社の社司に登用されることとなった。維新政府の中心人物だった大村益次郎や木戸孝允が深く関与したこの社司登用には、東京奠都を目論む彼らが、東京招魂社設置を推進するために行うという中央側の意図も存在した。また、東京に移住した報国隊の者たちは、西洋学問を学んだり、軍を通じて中央の要人たちと接近したりして、新たな学知や機会を手にしていったと考えられる。

一方で、遠州地域に留まり続けた報国隊の者たちの動向は多様であるが、従来の研究では運動後も地域の神職・神官を務め続けた山本金木に対する指摘があるのみだった。本プロジェクトでは、敷地村（現静岡県磐田市敷地）から遠州報国隊に参加した伊藤八重喜に着目し、伊藤家の文書の調査を行った。敷地村は遠州の中部から東部に位置する地域であり、山本のいた遠州の西部地域とは異なる実態があったと思われる。伊藤家は、代々敷地村の山王社（野辺神社）の神主を務める家である。伊藤八重喜は、明治に入りしばらくは山王社の神主を務めたが、明治7年7月には敷地村の副戸長として地域行政を担う役割となる。また、彼の子である伊藤泰治も、明治7年末に役場の書記を務め始め、大正5（1916）年に敷地村村長を辞職するまで長く地域行政に関与し、伊藤家がこの地域の行政を主導していったといえる。

そのように多様な実態をもつ一方で、報国隊参加者たちは近代社会の中で相互にネットワークを築いていたと考えられる。彼らのうち特に主要なメンバーは、明治期以降も縁戚関係を通じてネットワークを展開し続けていた。そのようなネットワークの中で、書簡などのやりとりを通じ、東京移住者が持った先進的な情報が、遠州地域にも共有され、地域行政の実施に繋がっていったという流れが想定される。

そして、そのネットワークを生かして実施されたのが、報国隊に対する大規模な顕彰運動である。これは、履歴書作成（明治26年）、記念碑作成（明治40年）、表彰請願（大正2年）、記念品保存（大正9年）など繰り返し実施されている。ある特定の人物が調査などを行っているわけではなく、比較的広い範囲の地域の者たちが協同的に運動を行ったことが特徴である。顕彰運動は報国隊に参加した当事者だけでなく次世代においても実施されており、「草莽隊」の歴史が継承され、また宗良親王や賀茂真淵など、遠州地域の過去との連続性を意識した歴史観が語られたことによって、徐々に地域の精神的模範として報国隊が位置づけられることとなった。こうして、報国隊の精神面を強調する伝説的な歴史観が形成された。

以上、「草莽隊」と近代社会について、ネットワークを軸として検討を行った。課題①の検討によってネットワークの空間的な広がりについて、また課題②の検討によって時間経過に伴う継承について、それぞれ明らかにすることができた。今後は、報国隊内部の他の事例や、他の「草莽隊」の実態、そしてそれらがどのように捉えられていったのかを検討することによって、今回得られた知見を深化させていく。